

今井教授著「ベルグソン」

恒 藤 武 一

過去において、わが國の哲學界は、アカデミーを中心にして見るならば、ドイツ哲學を殆んど無條件に受け入れ、極言すれば、その支配の下にあつたと言つても差支へなからう。かかる事態は偶然に生じたものではなく、根本的にはわが國社會の持つ歴史的性格——その後進性に基くものであるが、しかし何物にもとらわれず自由に思考することをその任務とする哲學者の態度とはおよそかけ離れていたと云ふべきである。現在事情は變化し、古い傳統を有する英佛の哲學は勿論、新大陸の哲學も盛んに紹介されるようになった。しかしかつて、ドイツ觀念論に基く哲學乃至は日本の哲學がいかに強くわが國の思想界を支配し青年層をとらへていたかと云ふことを考へると、さらに多くの權威ある啓蒙書の出現することが望ましい。本學法學部今井仙一教授が現代フランスの生んだ偉大な哲學者ベルグソンの哲學を解説された近著は上のごとき要請にこたへるものの一つとして、大きな意義を持つものであらう。

ベルグソンが現代フランスの否世界の哲學界に及した影響がどのようにな大きなものであつたかについて今更のべる必要もないが、單に哲學の分野に止まらず、フランスの法學に迄も影響

が及び、なほ又ラディカルな社會主義者であつたソレルも、ベルグソンの影響を受けたと云はれていることに注意したい。さて今井教授は、本書においてベルグソンの哲學を次のような項目に分つて解説されている。即「哲學的直觀」「二つの方法」持「續」「自己の構造」「物質と記憶」「笑い」「エラン・ヴェタル」「知性」「ミステイシズム」以上の九つの標題の下に敘述されている。やや形式的表現であるが、最初の二章は、ベルグソン哲學の方法論の解明であり、これに基く彼の哲學の具體的内容が以下に示されていると云へよう。しかもこの順序は大體ベルグソン哲學の發展に對應してをりベルグソンの處女作とも云ふべき「時間と自由」に相當重點がおかれていることと共に妥當であると考へられる。次に各章にわたつて今井教授がなされている解説が、ベルグソン哲學の忠實な又正確な解説であるかと云ふ點については、具體的例をあげて證明する迄もなからう。なほ限られた紙數の中に極めて適確にしかも判り易くベルグソンの哲學を要約し説明された今井教授の腕のさへ——こうしたぶしつけない表現を許して戴くとして——には敬意を表するのみである。以上ごく簡単に今井教授の近著を紹介させて戴いたのであるが、次に若干本書の中に表れている今井教授御自身の御見解に觸れると共に、若干の疑問を提出することにする。

教授は序文において本書を執筆された目的が哲學的人間學の立場からベルグソンを素描することにあることをまず述べられ次に「あらゆる偉大なる哲學者におけると同じく、ベルグソン

においてもまた、その哲學的關心の樞軸をなしたのはやはり人間の問題であつた」とされ、さらに「包括的な世界觀を基盤とすることなしには眞に具體的な人間學は成立することを得ないのである」が故に「ベルグソンの人間像を描き出すために、ベルグソンの世界觀をも或る程度まで明らかにする必要を感じた」と云はれている。従つてベルグソンの世界觀がいかなるものであるかが重要な問題となる。ところで教授は本書二三頁において、ベルグソンが哲學的直觀を旋風に比較したことをベルグソンの思索の根本的特徴とされ「なぜならベルグソンによれば、すべて内的にして單純なるものはつねに動的なもの、旋風の的なものであつた。そしてかかる動的、旋風のなもののみが、彼にとつて、眞に實在的と言われべきものであつた」と説明されつつ、さらに引續いて「その限りにおいて我々は、しばしば引用して語られるかのヘーゲルの命題を模して、ベルグソンの世界觀の基本原理を、「すべて實在的なものは動的であり、そしてすべて動的なものは實在的である」と規定することもできるであろう。」と述べておられる。問題はまず、ベルグソンの世界觀を表現するのにヘーゲルの命題を模することが適當であるか否かと云ふ點にある。がこの點については、筆者はベルグソンとヘーゲルとは氣質的には殆んど共通性がないと考へていることを述べるに止める。次にヘーゲルがすべて實在的なものは理性的であり、「理性的なものは實在的である」と述べたとき、彼は明らかに、理性的なものとしからざるもの、本質と假

象とを區別對立させ、兩者の間に價値の差別をつけていたのであつて、ベルグソンの場合と異なる。ベルグソンにあつては物質が必しも非實在的なものでないことは教授の指摘されているところであり(本書三三頁)要するに實在と云ふ概念はベルグソンの哲學にあつて、ヘーゲルにおける程重要な意味を持つていないと考へられる。第三に「動的なるもの」と云はれるが、ベルグソンが重視したのは、動的・旋風のなるもの、核心に存する純粹持續であり、エランであつて、動的旋風のなるものはその外面に過ぎぬ。従つて前述の命題を生かすなら、むしろ、「情的(emotional)であるいは生命的なものは……」と云つた方がより適當ではなからうか。なほ上記三三頁のすぐ前で、ベルグソンが科學と哲學に「一つの等しき價値」を認めるに至つたことを指摘されているが、この點は後述の問題と關聯して重要である。ベルグソンの哲學は決して反科學的反實證的性格のものとして、單純に考へることは出来ない。

第二の疑問は教授がベルグソンの哲學は、一般には「生の哲學」と言はれているが「より適切にはむしろ「實存哲學」のなかに位置せしめるべきではないであろうか」(本書五〇頁)と提言されている點に關する。もつともこの點については實存哲學を狹義に解すればベルグソンは實存哲學者とは言へないと後に述べられているが、いづれにしても實存主義的であるとされていることには變りない。(本書一六五頁)しかしある哲學が實存主義的哲學であるかどうかを決定するについては、その哲學に

あつて個人が即個人の在り方がいかなるものとして考へられて
 いるかが、本質的標識であると考へられる。この點については、
 ベルグソン哲學における個人は、實存主義的に把握されている
 とは思へない。なぜなら、ベルグソンは個人を孤立した個人とし
 て把へていないし、内面的自己を強く尊重しているけれども、
 しかしエラン・ヴェタルは究局においては各個人に限定され
 た固有のものでなく、汎神論的とも言はれ得べく個人は超絶的
 存在としては考へられてはいない。さらに思想の系譜と云ふ點
 からも、ベルグソン哲學が實存主義的哲學かどうか問題である
 が——同時にベルグソンを生の哲學者なりとする通説もこの點
 から問題にされ得るが、今精しく論ずる餘裕を持たない。只こ
 こで、かかる問題の考察にあつて、その哲學の持つ政治的性
 格の如何を無視することは出来ないことをつけ加へたい。ベル
 グソンの世界觀は基本的には、個人主義的人間主義的であり歸
 するところデモクラティックな世界觀であると筆者は考へる。

以上今井教授の近著「ベルグソン」について、ごく簡単な紹
 介をさせて戴くとともに若干の疑問を提出したのであるが、不
 十分な紹介であることを御詫びすると共に淺學なる筆者が未熟
 な見解をぶしつけに述べたことについて教授の御許しを乞ふ次
 第である。唯物論の立場からは、ベルグソンの哲學は高度の近
 代的觀念論であるとして批判されているが、それ丈にベルグソ
 ンの哲學を充分に理解し批判することは重要であろう。本書が

多くの人々によつて讀まれ、ベルグソンの哲學が深く検討され
 ることを最後に希望して拙文を終ることにする。

(今井仙一教授著「ベルグソン」弘文堂刊四六版一七四頁)

——一九四九・八・三・稿——

法政研究會報告

第十八回 六月二十九日(水)

「政治と法について」

發表者 今井仙一教授

出席者

高橋・田畑・高田・坂・岡本・今
 井・内田・恒藤・金山・藤村・岡
 本(善)・小野・加藤・八木・山本

第十九回 九月十四日(水)

「爭議權と團體交渉權に就いての基本的考察」

發表者 恒藤武二助教授

出席者

高橋・田畑・高田・坂・岡本・今
 井・内田・恒藤・金山・岡本(善)
 小野・加藤・八木・山本